学園長だより 第38回

蒼穹の風

愛知淑徳学園理事長・学園長　小林素文

長久手キャンパス新1号棟に高さ13メートル横10メートルの巨大な陶板画『蒼穹の風』が掲げられました。その除幕式で、原画製作者の久世直幸氏は「蒼穹とは青く晴れ渡った大空をさします。無限の可能性に満ちた若い時間を青空に託して、無限に満ちた未来に向けて風と共に進んでほしい、との願いを込めて製作しました」と語られました。

＊

昭和34年、今から64年前、池下の学舎に別れを告げ、校旗を掲げる生徒を先頭に全校生徒・教職員が池下から星ヶ丘の新学舎へと行進をいたしました。その日は青く晴れ渡った素晴らしい日。到着した真新しい星が丘学舎のグラウンドの演題に立った小林素三郎校長の第一声は、大空を指さし「これぞ淑徳晴れ」。そこには「淑徳生よ、このような青空に夢掲げて溌剌と学校生活を送ってくれ」との願いが込められていました。

平成7年、今から28年前、愛知淑徳大学は、新しい理念「違いを共に生きる」を掲げて男女共学体制に移行しました。新たな大学歌が必要となり、その作詞を詩人で愛知淑徳短期大学の教授、柏木義雄先生にお願いをすることとしました。まだ若かった私は、高名な詩人である先生に図々しくも「気高く、しかし分かりやすく、大学名も入れた歌詞にしてください」と注文をつけ依頼しました。

先生は黙って頷き「半年時間をください」とおっしゃられ、出来上がった作品が次です。

この丘で
ふみしめる大地のいぶき
いずこへ？とたどりゆく
照りかげり
天の深みへゆめかかげて
わたしたちのま昼のいま
近づく出会いへ風がまいたつ
愛知淑徳ASユニバーシティ
エース　エース
にんげんのはるけさを
共にあゆむ　ラーラー

素晴らしい大学歌をつくられた今は亡き柏木先生に心より感謝をいたします。

『蒼穹の風』は愛知淑徳学園創立120周年を記念するのにふさわしい陶板画です。

＊

『若草物語』の作者オルコットの少女時代はつらい日々も多く、厚い雲に押しつぶされそうなときには「雲の向こうはいつも青空（There is always light behind the clouds）」と望みを抱き続けたと伝えられています。

空が青く見えるのも風が吹くのも空気があるから。その空気と水が生きとし生けるものの命を育んでいます。

最初の宇宙飛行士ガガーリンが「宇宙は暗かった、しかし地球は青かった」と語ったように、空気と水のおかげで地球は暗い宇宙で青く輝いています。

命を育む奇跡の星に生を受けたことに感謝し、晴れた日には天の深みへ夢を掲げ、厚い雲におおわれた日にも希望を失うことなく、淑徳生が光輝く学校生活を送ることを願ってやみません。